

孤高の伝承者は、ハイブリット型職人へ進化する。



きりゆう

杞柳細工職人

寺内卓己(たくみ工芸)

兵庫県豊岡市



vol.1

きりゆう

杞柳細工を代表する製品、柳行李

柳行李は、機能性の高さから昔より重宝されてきたジャパンメイドの収納ケース。通気性がよく、害虫を寄せつけない成分を持っていることから大切な衣類や品物を守ってくれます。また伸縮性があり、大量の荷物を収納しても型くずれすることなく元の形に戻るという優れたもの。ご飯やおにぎりを入れる製品に、飯行李があります。ご飯が悪くなるのを防いで、おいしさを保ってくれるほか、水分を吸収した行李は膨張する特性があり、行李に水を汲んで飲むこともできるとは驚くべき機能性！



原料はヤナギ科の植物

湿地帯に育つコリヤナギが杞柳細工の原料。かつてはコリヤナギを栽培する農家も多かったのですが、いまは職人が畑でコリヤナギを育て編みあげるまで一貫して行います。



冬ごもり期のコリヤナギ。束ねておくことでまっすぐに矯正する

光沢ある網目模様が美しい

籐よりも太い柳は、網目模様がはっきりと主張している。光沢があり、手触りもいい。



パリ万博で話題をさらった行李鞆

明治33年(1900年)に開かれたパリ万博に出品された革バンド付きの行李鞆は、その機能性の高さと質の高さに、世界から注目されることになったと言われています。



革ベルトを装着することで、膨らんだ鞆を縛り収納する。3本の革ベルトが単なるデザインではなく、機能美が素晴らしい行李鞆



パリ万博当時の写真

散策が楽しい城下町に杞柳細工の工房がある

兵庫県豊岡で生まれ育った杞柳細工を受け継ぐ職人は、今では寺内さんひとりだけ。工房は城下町の出石(いずし)にあります。城下町の風情が残る出石は多くの観光客が訪れる観光地。工房は店舗も兼ねているので、観光客は杞柳細工をここで買うことができ、寺内さんの作業風景も見学することができます。

きりゆう



城下町出石に工房を構えるたくみ工芸



かがみこんだ姿勢で手足を使い、ひたすら編みこんでいく姿は、ずっと見ても飽きることはない

皮をはいだ柳を麻糸をつかって編みこんでいく。両足を折り曲げかがみこんで編むのは昔から伝わる伝統的なやり方。両手を使って柳を編みこみ、足をつかって麻糸を調整していく。行李編みは、難易度が高く、熟練した技術が必要とされます。柳行李は一般的に少々値が張る製品だが、高い技術力を要求される作業風景を見ていると十分納得できるものがあります。



一人前になるには10年~15年かかるとされている難易度の高い行李編み

ひとりだけだから、いろんな顔を兼任しています(笑)

たった一人で杞柳細工を受け継いでいる寺内さんは、平成23年度伝統的工芸品産業大賞を受賞。「表彰式では嬉しいよりも、先達に申し訳なく早く帰りたい気分だった。(笑)」杞柳細工は手仕事なので量産できない。だからその価値を本当にわかってくれる方に、できれば直接販売したい。本業は職人だけど、商売人でもあり、ヤナギ栽培農家でもあります、と屈託のない笑顔で語る。



気さくな人柄の寺内さん

取材中にかかってきた一本の電話

「長年使っていた柳行李の引き取り手がない。捨てるにはしのびないから引取ってくれないか」と、神戸在住の老人から一本の電話がかかってきた。「柳行李は、時間が経つと飴色になり、それが味わい深く愛着がわくもの。」と話す寺内さん。しょうがないと言いつつも引き取りに応じていた寺内さんに柳行李に対する愛情を垣間見ることができた。ひとりだからいろんな顔を兼任していくハイブリット型ともいえる新しい職人のスタイル。そしてモノを大切にする愛情。伝統工芸を残していこうという寺内さんの信念が伝わってくる。